

Simple Content Access と Subscription Service

2022-03-10

森若 和雄

従来のサブスクリプション管理で発生するトラブル



subscription-managerでPool IDを指定する手順が面倒くさい。
CentOSなら不要なのに.....。

あるプログラマー



システム登録が煩雑なため未登録のシステムが多数ある。社内でどれだけ利用しているのかは各部門に問いあわせて確認している。

ある購買担当者



「登録できないから助けて」と言われ調べたら既に消したシステムがエンタイトルメントを消費していて.....

あるサポートエンジニア

従来のサブスクリプション管理(enforcing mode)の問題点



中途半端な強制

不正利用をブロックする
能力は低い

過剰なブロックをして
しまいがち



運用の複雑さ

ハードウェア移行などの
単純な作業が複雑になりがち

細かい問題で
手順がうまくいかなくなる



データが複雑

サブスクリプションを
買い足すと、新しい
entitlement poolができ
さらに複雑になる

複数の契約が並行すると
複雑さが増してしまう

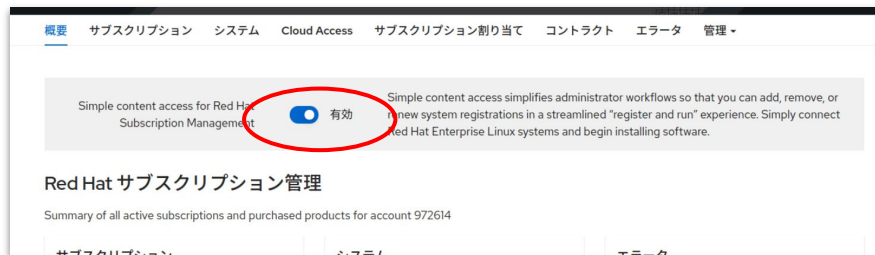
Simple Content Access

Simple Content Access は、購入している製品の利用を簡単にするサブスクリプション管理のオプションです。

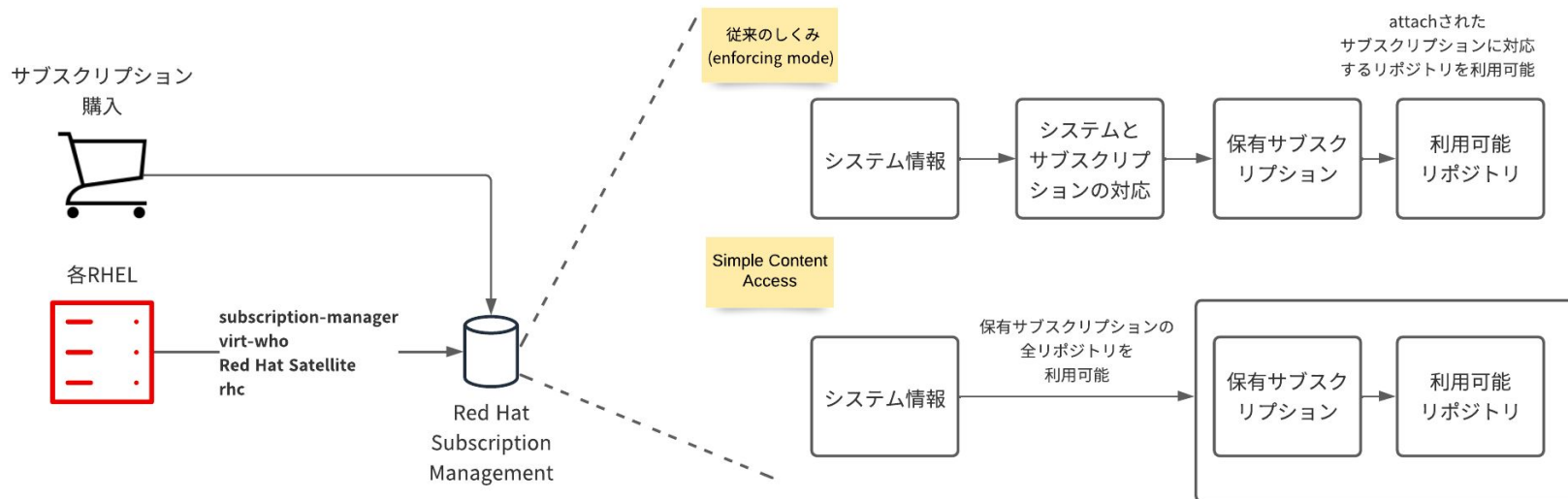
Simple Content Accessが有効だと:

- システムとサブスクリプションとの**対応づけ(アタッチ)**が**不要**になります
- 引き続き**システムの登録は必要**です
- 利用サブスクリプション数を**厳密に数える能力がなくなります**
- 保有しているエンタイトルの上限を超えても**技術的には何も強制されません**
(※不足している状態は契約違反です)

Simple Content Accessはセルフサービスで利用開始できます(*)



従来のしくみとSimple Content Accessの比較



Simple Content Accessが嬉しい人は？

以下のような人

- ▶ subscription-managerによる強制以外の方式 (台帳でも何でもOK)で契約を守れている
- ▶ 契約更新時のpool IDの変更などによる業務負担が大きい
- ▶ 簡単に登録して利用を開始したい

Simple Content Accessを有効にするとまずい人は？

以下のいずれかを満たす人

- ▶ Red Hat Subscription Managementを利用してサブスクリプション利用状況を厳密に管理している
- ▶ 法令遵守などのため各システムとサブスクリプションを対応づける必要がある
- ▶ サポート窓口が異なる OEM製品と直接サポートの製品が混在している
- ▶ 「subscription-manager attach」が失敗することを契機として不足を検出するようなワークフローがある

Simple Content Accessは.....



～～である

購入済み製品へのアクセスを簡単にする



～～ではない

契約への影響

使い放題の契約

購入していない製品へのアクセス

従量課金

virt-whoの必要有無に影響

利用コマンド例

```
[root@rhel8 ~]# subscription-manager register  
Registering to:  
subscription.rhsm.redhat.com:443/subscription  
Username: kmoriwak  
Password:  
The system has been registered with ID:  
478dea8a-4fea-41ac-99b5-43753cbf9379  
The registered system name is: rhel8  
[root@rhel8 ~]# yum update -y
```

システムを登録する

従来必要だったサブスクリプションの対応づけ(attach)がない

パッケージを
利用できる

Simple Content Access開始時の注意

アカウント全体でsubscription-manager attach は不要だけでなく実行すると失敗するようになります。関係者への事前告知でトラブルを減らしましょう。

運用負荷を軽減するため、Red Hat Enterprise Linuxのサブスクリプション管理のオプション Simple Contents Accessを有効にします。予想される影響は以下のとおりです。

- subscription-manager attach または subscription-manager register --auto-attach コマンドが失敗するようになります。この失敗は安全に無視できます。

Simple Content Accessについて詳しくは以下の Red Hat社ナレッジ記事をご参照ください。

<https://access.redhat.com/ja/articles/6098461>

<https://access.redhat.com/articles/4903191>

Simple Content Access 関連リンク集

- ▶ ドキュメント「シンプルコンテンツアクセスを開始する」
https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/subscription_central/2021/html-single/getting_started_with_simple_content_access/index
- ▶ Simple Content Access
<https://access.redhat.com/ja/articles/6098461>
- ▶ Simple Content Access FAQ
<https://access.redhat.com/ja/articles/6247271>
- ▶ カスタマーポータル内サブスクリプション管理
<https://access.redhat.com/management>

Subscription Service (旧名 Subscription Watch)

Subscription Service(※1)

Subscription Service は物理・仮想、オンプレミス・クラウドを問わずサブスクリプションの利用状況をレポートするSaaSツールです。(※2)

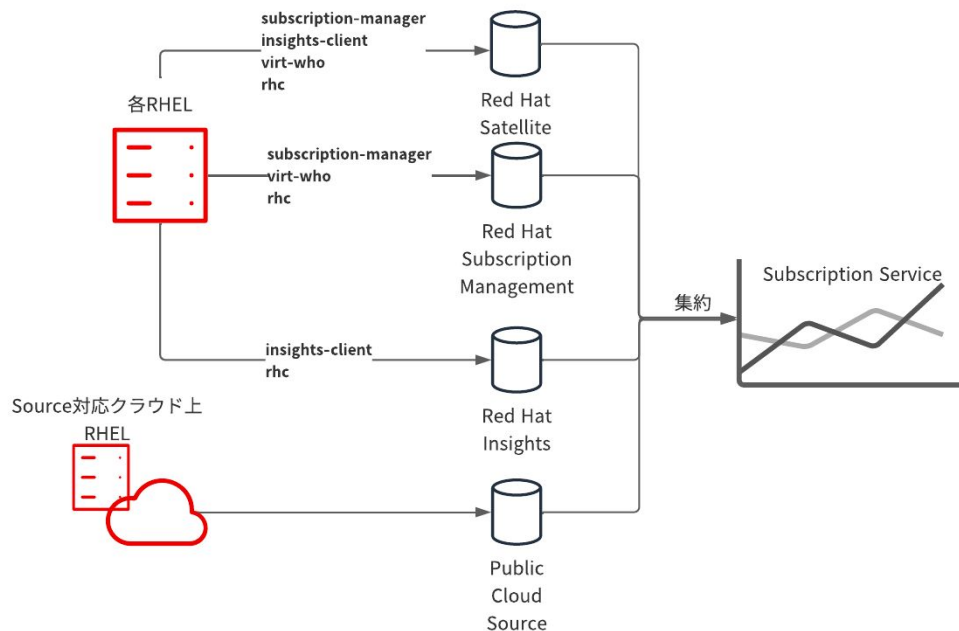
Subscription Service は以下の特徴があります

- アカウント全体でのサブスクリプション利用を一覧
- サブスクリプションの総利用量と購入量の両方を表示
- console.redhat.com で利用可能

(※1) 従来 Subscription Watch という名前でしたが改名しました

(※2) 現在は Red Hat Enterprise Linux および Red Hat OpenShift Container Platformにのみ対応しています。

Subscription Service 概要



Subscription Serviceは、複数の情報源から収集したサブスクリプション利用状況を集約して表示します。

一部パブリッククラウド上 (*)ではVM利用を自動的に記録するSource機能を提供しており、各VMをsubscription-managerで登録しない場合にも対応します。

Subscription Serviceは



～～である

オンプレとクラウドの利用を一覧

SaaSベース

セットアップは最低限

追加費用なし

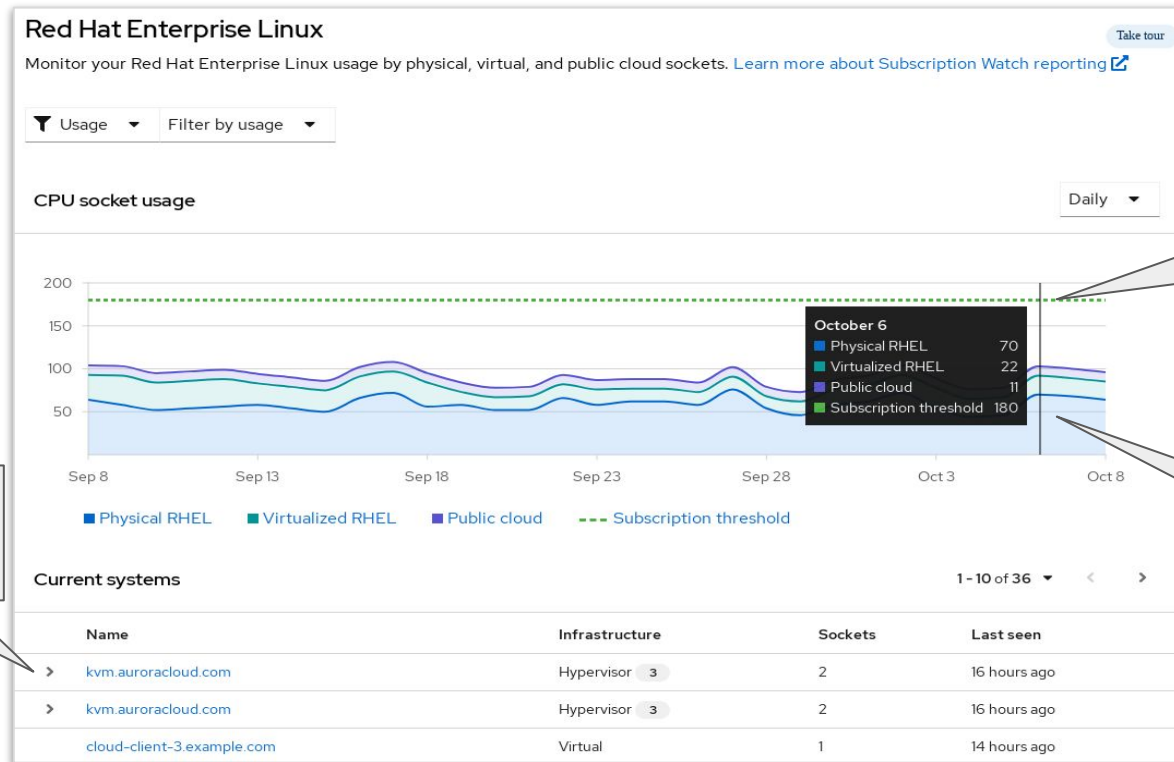


～～ではない

費用のダッシュボード

従量課金プログラム

Subscription Service画面例



現在認識されているシステム

購入サブスクリプションの上限

日次の利用状況

Subscription Service 関連リンク集

- ▶ Hybrid Cloud Console内 Subscription Service
<https://console.redhat.com/insights/subscriptions>
- ▶ ナレッジ記事: Subscription Watch
<https://access.redhat.com/articles/subscription-watch>
- ▶ ナレッジ記事: Subscription Wath FAQ
<https://access.redhat.com/articles/4897921>
- ▶ ドキュメント「サブスクリプションサービスの使用を開始する」
https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/subscription_central/2021/html-single/getting_started_with_the_subscriptions_service/index

Thank you

Red Hat is the world's leading provider of enterprise open source software solutions. Award-winning support, training, and consulting services make Red Hat a trusted adviser to the Fortune 500.

 linkedin.com/company/red-hat

 youtube.com/user/RedHatVideos

 facebook.com/redhatinc

 twitter.com/RedHat